

目標が。マア何時なと、有た時に返したら宜えがナ云ふて、店の金立替えて送らした處が、折返して親元から、豪う嬉し相な禮狀が來たわいな。其手紙を私に見せて番頭さんのお蔭で生れて始めの親孝行が出けました、就きましては今日着破つた寝間着と抜毛を賣りましたお金が四十五錢、是れ丈けを鳥渡内入に。や宜しいチウので帳面へ四十五錢入りや。又三月程してから二十八錢入、十六錢入、九錢入、六錢入と、これも又六七遍も入れたやるか、後は帳面ドガチャガ。夫れ此處が番頭の有難さ、茲等に仰山居よるけれど、薬人形同然唯人間の恰好してよる丈けや。ツマリ皆んな、飯喰ふ鳥脅し見たいな物や。萬事は店を預かる番頭の胸三寸、私の考へ一つで物事は何ふにでも成るのや。……處でチョツと咄をしと置んならんが。私は今年が四十で來年別家する身や、別家をしたら差し詰め女房を持たにや成らぬが、まア氣性の優しい娘が有たらと、實は内々夫れと無しに搜して……時に私しや冷え性とても云ふのか、夜になると小便が近いのや、夫れが何分眠むた眼で往くもんやで、歸りに部屋を間違ふ事が能う有るね、萬が一お前はんの部屋へでも間違ふて這入た時にやナ、キヤアとかスウとか云われると、來年の別家もポコペンで、今迄の辛抱も川口で船や、其處んところをば、お前はんの胸一つで、なア夫れ。ドガチャガく、と仕といて呉れたら、其處は魚心あれば水心、水心あれば魚心」△「猪名川土俵で逢わふ」番頭「誰ぢやい。鐵ヶ嶽みたいに云やがるのは」△「番頭はん、貴方何云ふてなはんね」番頭「女婢の給金極めてるのやがナ」△「女婢さんなら、モウ先刻に内らへ這

入らりましたデ」番頭「そんなら此處にお叩頭してるのは誰や」△「そら奎平どんが頭から風呂敷を被て、俯いて居やりますのや」番頭「コラ奎平、何しやがんね」奎「イヨウ番頭はん、帯も何も要りまへん依つて、拾圓丈け一つドガチャガ……」番頭「阿呆云へ、皆聽てくさる、碌な事仕やがらん、コレ丁稚、店の煙管が詰て有たら、云わいでも羅宇仕替えを爲しとかんかい」丁稚「番頭はん、そら私いの矢立だんがな」番頭「何や、こら矢立か」番頭モウ眼も見えぬ様に成てよる。女中「これは御寮人様でムりますか、初めましてお眼に掛ります、何分不束な者でムりますが宜敷ふお頼み申します」御寮人「まア、貴女が來て呉れてやつたんか、オ、いや。別嬪さんやこと、誰が口入屋へ往たんや、定吉お前か、成る丈け山から這ひ出の容貌な娘を呼んどいと、彼ないに八釜敷う云ふたアるのに、何で此様な綺麗なお娘を連れて來たんや」丁稚「私い口入屋で云ふたんだつせ。成るだけへチヤな人やないと不可んてな。そしたら小父さんが云ふてました。今年梅雨に降て土用に照たんで、何所とも女婢の出來が宜ろしふおますのやと」御寮人「全でお米やがナ、此前にも鳥渡良え娘が來たら、三晩もお店が徹夜ガヤ／＼云ふてる物やさかい、吃驚して逃げて去んで仕舞ふたがナ……まア貴女氣にせんと置いてや。何しろお店に若い者が仰山居るさかい、此方も夫れで氣を遣ふのや。下の女婢と思ふて呼びに遣たんやが、貴女見たいな綺麗なお娘、下と云ふ譯にも往けへんワ。上の方を勤めて貰ふとすると、ちいと許りお針を持て貰はんならんが貴女何ふや」女中「マア御寮人さん、お針の事を申されま